Keio Associated Repository of Academic resouces

nero Associated Repository of Aedderme resources	
Title	ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの
Sub Title	
Author	船田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.15, No.4 (1937. 2) ,p.1(513)- 38(550)
JaLC DOI	
Abstract	Leopold v. Kanke (1795-1888)の永い一生中には、記念すべき年も少くなかったであらうと思はれるが、今より丁度百年前、即ち一八三六年もその中に數へ入れられる年の一つであらう。何となれば彼の正式に伯林大學の正教授に就職したのが、實に是の年であったからである。しかし彼が三二年以来、その編輯に從事せるHistorisch-politische Zeitschariftを廢刊するの止むなきに至つたのもこの年であり、その傑作羅馬法皇史を完成して、益々その名筆をたかめたのもこの年であり、その父を亡ひ、次いで十旬を經ずして、その母の喪に服するに至つたのも亦この年であった。この機に三六年は彼にとつては所謂悲喜交々到れる年としてその記憶に銘ぜられたことであつたらうと思はれる。百年前のこの年を機會に彼れを囘想して。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの メッド

船田三郎

彼れを回想して。 彼にとつては所謂悲喜交々到れる年としてその記憶に銘ぜられたことであつたらうと思はれる。百年前のこの年を機會に であり、その父を亡ひ、次いで十旬を經ずして、その母の喪に服するに至つたのも亦この年であつた。この樣に三六年は を廢刊するの止むなきに至つたのもこの年であり、その傑作羅馬法皇史を完成して、益々その名聲をたかめたのもこの年 たのが、實に是の年であつたからである。しかし彼が三二年以來、その編輯に從事せる Historisch-politische Zeitschrift 百年前、卽ち一八三六年もその中に數へ入れられる年の一つであらう。何となれば彼の正式に伯林大學の正教授に就職し Leopold v. Ranke (1795—1886)の永い一生中には、記念すべき年も少くなかつたであらうと思はれるが、今より丁慶

Werke, Bd., 53/4. S. 665. Ich sage nichts, als…dass ich erst will verstanden sein, ehe denn gerichtet.—Sämtliche

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの(船田)

然科學 然るに する では な 72 ケ像を見 人 解 世、 n には n る形 B るが 72 の相違 認 遍 及 純 叉彼 その か、 そ オ 第 to 然 的 如くひょくのは、 0 主 本。 M 解釋 るに、 そ は 決 義 四 上學 72 る N ٢ する所よりして、「彼が前世紀の精神史中に於て、 さし る のラ 所 ŀ 的 n し 0 經 で、 的 1 傾 學 に に T 7 一驗史家 E 1 神 者 親近せる、從つて現代的思考の潮 ろこの歴史研究の大家は、<br /> 傾向の一 反對 ゲ 向 才 n 今更云 ケ 祕 ટ に w ン・ 觀 よれ は 的 する態度を以 0 カゞ であ ラ 必ずしも一 は 歷 ならざる所以 ふ迄 如何 單にその表現の仕方、 つをあらはせるものとなす。 史哲學 ば Z 1 る ケ 0 カゞ もな で 彼 カジ 歷 如く 史的 あ 十 E は 様であ て忘恩 つ 5 九 は w 見 世 を説 1 72 ことで 思 紀に テル בלל 考 5 他の學者はこれに反し、 つたとは と云ふ問題を提供して、 の中 的 72 < ある Þ 自然科學 於ける最 B く反對して居るに 了 樞 Ż 0 りとさ 或はその様式の然らしむる所で、 カゞ 曷 をなすも 1 流 ある。 云へない。 ٤ の中 大史家であること、 的精 テの L 又或るものはその理念に關 カコ なす に入れらるべ しこの大史家が多數 神に その 0 影響を受け もの で 如何なる特殊 即ち或る學者は彼を以て、 他 無限に接近し、 あると見ら も拘らず、 カゞ 歷 その思想を以て獨逸觀 彼 あ 史家や、 さ る。 は き立場に 浪 8 少 却 0 カコ 漫 n 0 くもその一人で て之を 派 で、 地 る。 ζ. 哲學者の心眼 の學者によつ その専攻する史學 位 に周 0 立つもので 7 神 を占むべ 如 Ļ 質は決して する 秘 < ^ n 學 に 的 Z 者 ゲ 對 唯 實 念論 n して きか 人 n 心 0 あると断 に映 τ 證 あること カジ 15 論 彼 0 主 如 形 0 形 の問 b 叉 的 侧 1 最 じ 義 何 史家 1 ٤ M 思 丽 關 1 も主要 72 を 1 於 想 Ŀ 上 題 引 す ずる、 ラン 代 は で自 觀 學 學 る見 さん の中 傾 は、 何 的 的 向

Z 彼は 彼 與 所 これに對して、Ich bin überhaupt viel originaler, als Sie denken と答へたと云ふことあるが、 も只その一方面のみに拘はるが爲めではなからうか。 未だ一義的な解答を見出しては居ない」と主張する學者もある程である。 0 ことを要しない。 ることを意味することは云ふ迄もないが、しかし original と云ふことは、必ずしも文字通り獨創 の答辯は必ずしも如上の言と矛盾するものではなからう。それはある特定の説を機承せるもの 然らば何處に しとの意 へた の尠 0 當然のことであらうが、しかしこの様に相異なる見解の、彼の歴史的思想について下さる 思想 キルヘルム・シェラー(Wilhelm Scherer)によつて、その先驅者、 る からざりしことはその自白する所であり、又二十年代に於ける哲學派と歷史派との鬪 刺戟、 味に の思 の成熟し來る迄には、當時の多方面的な思想が彼に影響を及ぼしたものと見ねばならぬ。 想は、 いろく も解せられ あるであらうか。 殊に歴史派を代表する人々の、 むしろ多種の思想を攝取し、 彼自ら云つて居る樣に、他人の考ふるよりも original な思想要素をその中に見出し得るであらう。 るからである。 蓋しそれは彼の歴史に闘する思想の 現に彼はツキデデス、ニーブール、ルーテル、 彼に及ぼせる威化は又その認むる所であ 咀嚼し、消化し、かくて己れの個性を通して産出せるも 彼の思想は決して單純では 從つて彼の立脚地なり、 全面に 或はその蒙れる影響を訊された時、 なもの 凮 無論それは上述せる所より見 n る であつたにせよ、 考察に基づ なか つ つたのである。 72 フィヒテに負ふ 争の、 思想傾向な カー 換言すれば 7 しかしこ にあらざ 根 據 たる 何 は

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

(船田)

ばなら なる この區別に關係するものであるからである。 での歴史、 居 あらう。 りが問題とせらる、とき、 如何に解したるか。 りである。 る場合、 たの 程 T 彼 D. 常に念頭におかねばならぬ所のものであるが、今こゝにランケを主題とせんとする時、 と思 ある。 L は、 何となれば今述べた表裏二面の考察も、 或は學としての歴史と、 t)a 200 しその裏面には、 表 故に 面からこれを見れば、 しかしこの場合、 又彼は存在としての歴史に對して如何なる見解を抱いて居たであらうか その歴史的思想について述べんとするとき、彼は少くともこの兩 單に一方面 或はその研究の根柢には、 存在としての歴史との 何よりも先づ注意すべきことは、 その研究に於て最も經驗的、 からのみ彼を觀ると云ふことは、決して當を得たことと云へない。 然らばランケは認識としての歴史の本質と、 又先きに擧げた諸家のランケに闘する見解も、 熾烈なる哲學的、 區別である。 實證的、 認識としての歴 この 否 區別は歴 科學的であつたと云へるで 宗教 数的要求 一史と、 史一般を問題 方面 その方法とを カコ 出 ら見 'n× 一來事 存在 殊に然 6 星星 して n ね

راديس اعضي

先づ順序として第一の問題より始めよう。

を研究して、 よれば その真理を闡明する所に存する。 認識としての歴史、 即ら歴史研 究の果さゞるべからざる任務は、 これが實にこの研究の第一の、直接的目的であつた。勿 何よりも先づ 個 の事實

外的 何等 最もよく云ひあらはされて居るのである。尤もこの一節はよく引用せらるゝ所であり、 論彼 Versuch nicht: er zum Nutzen zukünftiger Jahre zu belehren, beigemessen : so hoher Aemter unterwindet sich gegenwärtiger その目的とする所である。このことは彼の處女作、 繰り返す所 めにとか、 ること、 を以て己れ 1= K 0 いに特にこれを掲げておかう。Man hat der Historie das Amt, die Vergangenheit zu richten, die 直 あ の知れる句ではあると思ふが、しかしそれが實に彼の一生の研究を支配した所のものであるか つた カコ な目的の爲 接 は後に述ぶる所によつて明かなるが如く、その最後の目的をは他の所においたにしても、 質用 のであ 目的は、 に供 政治上、 れ の本來の任務となす」と云ひ、 であつた。 カジ る。 せんが爲めに、歴史研究に從事するのでなくして、その目的は一に「史實の真」 めに存するのではない。 歴史研究」の本質であると云ふ。 will blos zeigen, wie es eigentlich gewesen. この言によつても明かなるが如く、彼は 史實そのもの 道德上乃至藝術上の目的の爲 勿論彼にとつては、この 卽ち彼は →探究にありと確信して居たのである。このことは機會ある度毎に彼 Historie 只事質を明かにして、 即ち Erforschung der Tatsachen と云ひ、「事實の探究そのもの また「事實を、 「史實の眞」を明かにすると云ふことが、 之を消極的に云へば、この研究は實際生活の利 めにとか、 ラティン・ゲルマ そがある通りに認識して、之をそのま、表現す 云ふが如く、 その真理を知ると云ふことそれ自體 ン民族史の序言中の 歷史研究 より見れば その結果 從つて多數の人 一節によって 歷 0 から見 一史研究 むしろ 益 刚明 の爲 موہ مسا 0)

ブンケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

(船田)

して ラン 彼にとつては「事實が、よし如何に制限せられた、 すべて「想像によつて成 論これは を懐 ٤ 歷 的 更に からである。 歷 當然その とする 7 ルイ十一 作 史研 史研究に從事せる時、 又歷 見 ケ 品に いたと云ふことであるが、 何等 れば、 から 究 目 スコ 求 一史研究 かゞ 的 國 の利益をも齎さないと云ふのではない。實際、例へば政治家が一國の政治に關與せんとする時、 見れ 世との取扱方であつた。 と云 to の歴 企圖 ット 後者は遙 ランケ自らの研究によれば、 る ば許すべからざることであつた。 しせらる は整 ふが カゞ 史に關する知識を必要とするであらう。しかし學としての歷史は、 の知つて居た筈である。 如き自由 狮 如きものによつて左右せられてはならない。 かに美しく又興味あるものであつた。彼はかくの如く見て、己れの研究に於ては 一時、 上の目的を實現せんが爲めに存するのでもない。 れるものは一切これを避け、嚴格に事實によらんとした」と云ふことであるが、 偶 な展開 R ス それによつて事實の公平なる觀察は、 就中その不滿に堪へなかつたことは、 = と云ふことは、 " それは結局、 ŀ 0 歷 **业**史小說 にも拘らず彼は全然非歴史的な取扱方をして居るが、 ス = ッ トの描けるが如き人物は實際には存在しなかつた。 スコットの物せる所を、 ス これを歴史研究に要求することは出來 醜いものであるにしても、これを嚴密に事實として Quentin Durward = ッ ŀ の描 く所は全然史質を 何となれば何等かの目的を措定して、 阻害せらるゝの虞あるからである。 この を讀み、 從つて 實際歷史に記載せる所と比 小 說中 これ カコ に於け の藝術 無視せ 政治家自らが果さん に對して大な る ない。 上の 3 8 力 理論 **B** で 彼 w 大膽王 。る反威 それ あつ 办多 は 初 勿 較 办 72 計 め

表 現せねばならない。 これが歴史研究の最高法則である」とは彼の確信であつたのである。

う。 之を超越 棄てねば 云 あ を有せず、又これに對して何等の態度を取らぬと云ふことは、 は V, 翾 爭 後 L カコ 政治上 L 初 に かし何人たりと雖も苟も史家たる以上は、 對 ならぬ。 彼 めて之を記 して高所大所 L に T よれば想像のみが の主義、 何等の 勿論 逃せ 宗教上のドグマと云 價値判斷を下さず、 より、 何人でも政治上の闘争や、 ねばならぬ。 翾 争當事 史家によつて排斥せらるべ 實にこくに史家 者の意圖する所を理解 純客觀的態度を以てこれにのぞむべきことを意味するもので 八 社 宗派 會 かゝる闘争や軋轢を超越しなければならぬ。 の輿論と云ひ、 の軋轢やに當面する時、 の任務が きもので L 實際人としては到底不可能 存す。 かくしてこれに從つてその行 個人の意見と云ひ、 はない。 とは彼 の云 Z これに開 0 ふ所で 他 理 論 あ 史家は して何等 と云ひ、 る。 のことであら 蓋しこれ 動を評價 切之を 學說 Ò カ> 意 9 見 ٤

時代 H は る 或る 0 カコ 彼 最 も神 5 は 機 چ Ŀ 會に 若し 13 0 の前 様 に於て に純 ٢ ものなりと云 Böhmer n に 客觀的態度を持し、 反 は平等なるもので に反對して居るの する様な史家に遭遇 Ž. カゞ 如き意見 事質 あ 3 7 に捕 かっ する あ の真をあらはすことを以て、 ら は 3 時 かゞ n あ T 居 る時代を以て特に神に選ばれ Z そは當然彼 たか n は この 爲めで 史家 0 批 あつた。 0 評 0 第十三 的 **史家** ラ とならざるを得な の第 7 世 4 一紀を以 より たる時代と見ると云ふ の目 見 T n 的 とし ば、 あら カコ 100 如 12 9 何 3 72 であ 世 な 紀 3 彼

らう

ンケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

(船田)

仕方によつては、 先づ吾人 そすれ、 ねば ス ことは大なる誤謬であつたのである。更に又彼はある時ゲルヴィーヌスを非難したが、 「現在」に己れの立場を取つて、これより過去を考察すると云ふことも、 ならぬと云ふ持論 が實人生から己れの立場を取り、そしてそこから歴史を考察せんとしたからである。 カコ これに照して他の時代を批評すると云ふことも避けねばならぬことであつた。 かる態度を取つたと云ふ理由は、歴史研究は純客觀的であり得ない、そは實人生にはたらきかけ 學が は現在をはなれ、 人生にはたらきかけると云ふことにはならぬ。 彼の所謂歷史研究の目的は到底果されないからである。 に存するのである。しかしランケによれば、 自由な客觀的な立場に立つことを要すると云ふのであるが、 若しこのことを可能ならしめんとすれ かゝる立場からは人生が學に影響こ 過去 の或る時代を理想的時代 何となれば それ 彼 15 にとつては は結局この ッ z) > 4 ゝる -Z

7 彼はその著「英國史」中に於て「予は予の自我を消して、只事物をして語らしめんことを欲す。」とさへ 史と云ふが如きものを研究するに際しても、宗教改革を、革命を論ずる場合も、ドン・カーロ 爲めに、彼は如何なる場合に於ても、換言すれば英、佛と云ふが如き外國の歷史の研究に於ても、 ナロ 繰返して云ふが、彼にとつては事實の爲めの事實と云ふことは、その最も重んずる所であつた。 而してこの點からして彼は、史家ドロイゼンの「自ら云ふ所多く、事物をして口をきかしむるこ ーラを、 ワレンシュタインを記述する場合も、全然主觀を捨てい、事實を如實に現はさんとした。 法皇 その

場か とり、 もの ことが ٤ 消し去るとすれば、 A) れば、 る自我 所であつた。 さへ云つて居 から 忞 との少き」を非難して居るのであるが、この句は最もよく彼の立場を表はして居るものと云はねばなら カジ 消さんことを望 句にもれる意味はそこにあつたのでない。 ら歴 因にランケのこの句を引用して自我を消しては學の研究そのものが不可能ではないかと、 如きものとを區別することが出來ると思ふ。 は矛盾するの言ではないかと。しかし吾人はこゝに ある。 出來 で 主觀を消すと云ふことゝ、 t)> ある。 史を是非することであつた。 くて之を是非し、 ない。 勿論それは難ずるものゝ云ふ通りである。研究の主體は自我なるが故に、この自我を全然 現に彼は自ら明かに、「對象の認識に主觀的媒介の必要なることは吾人の本性に存す」と、 る程であるからである。 IJ 事質、 h ツ だ我 カー 學的研究は到底なし得るものにあらざることは云ふ迄もない。しかしランケのこの 彼 ŀ は前者であり、 褒貶する自我であり、 の價値評價と價値關係との區別も結局こゝに歸着することと思 の嫌惡せし所 主觀 彼にとつては の媒介を要すと云ふことゝは必ずしも矛盾 或は云はん、自我を消すと云ふことと、 對象の認識に必要と見たる主觀は後者である。 0 ものは何等 學的研究に自我の必要なることは、云ふ迄もなく彼の知る 前者は一定の立場に立ち、事物に對して一定の態度を 後者は只事實の眞理を明かにすることをのみ目的とす 「歴史は刑事裁判ではなかつた。」 カマ の立場に囚 praktisches Ich ~ wissenschaftliches Ich は n ることであつた。 主観を必要とすと云ふこ するの言 彼 カュ 0 < そしてその立 ż C 希求せし所 カゞ あると云ふ 0 如く 批 難 ランケ と云 する

する 虚飾なき赤裸々の眞理の把握、これ彼の念願とする所であつた。彼がラティン・ゲルマン民族史の研究 の理論を超越して、只管事實を明かにせんとつとめたのである。 あ 事問題を論ずる樣な場合に於ても亦さうであつた。彼は一八三○年代、 かしこの事實の真を重んずると言ふことは、所謂歷史研究に於てのみ存したのではない。彼に於ては時 を避け、 は に際して、この歴史に關係ある史家の批評を試みたのも、この希望を實現せんが爲めであつた。 であつた。本來如何にあつたかを示すと云ふことがその欲求する所であつた。個 とも理解 る態度を以て事物にのぞむことを意味する。 うと云ふことであつた。この點からして彼の立場たる所謂客觀主義の如何なるものであるか、 0 ない。 3 以上述べた所によつて明か のは公平無私、 出來得る限り直接史料に頼らんとしたのも、 の何 この場合、 詮ずる所、 せらるゝと思ふが、それ n にも左祖せず、 彼のとれる態度は、 それは何等の立場、 全然事物の中に沒入し、かくて自ら口をきかず、 なるが如く、 否 は如何なる意味でも我と云はるゝものは皆これをなくすと云ふことで 理論と名のつく以上はその中間に位するものをもとらず、 如何なる主義にも、 何等の主義、 彼にとつては史實と云ふことが先づ第一に、 彼は云ふ、Objektivität ist zugleich 亦この希望を充さんが爲めに外ならなかつた。 何等の主張にも囚 理論にもよらずと云ふことであつた。 何となれば眞理は只事實にのみ存す、 事物そのものをして物語らしめよ 政治雑誌の編輯に從事したので はれず、 K Unparteilichkeit 不偏不黨、 の事質の根本 その開心する所 公平無私な と云ふこ 却て一切 的探究、 編纂物 相反

単に とは彼の確信する所であつたからである。從つて彼のこの雑誌に掲載せる論文は、 云ふことを如何に重んじたかと云ふことは、これによつても理解せられ得ることと思ふ あ であつた。 った。 Politische Zeitschrift と以はず、 無論この雑誌は失敗に終つたものと云はねばならぬが、しかしそれは兎に角、 彼は歴史的事實によつて理論の誤謬を是正せんとしたのであつた。彼がこの雑誌を名付けて、 特にこれを Historisch-politische Zeitschrift と云へるもその爲めで 何れも歴史的なもの 彼が史實の真と

(Tipecatis) America (Tablesis)

質の なる 花を愛する L る ふことに着眼 一史家 通 以 カ> し彼 探究その 上余は特殊の事實と云ふことが、ランケの最も重んずる所であつたと云ふことを述べたのであるが、 部門に屬する は普遍に對して眼を開けておくことが必要である」と云ひ、 史家 0 もの 歴史研究は單にそれ丈に始終したのであらうか。 72 もの る > 只花な 決して之を忽にすべ 0 に必要なる條件の全部では か を顧みざるが 如く斷じ、 るが故に之をたのしみ、 叉史家は個 如くでなければならぬと云つて居るが、 からざることを以て、 々の出來事そのものに興味を有し、快樂を感ずること、 なく、 それがリン 只その一 ネの 勿論彼は上にも述べた樣に、 史家の第二の條 つに過ぎなか 如何なる種類に、 又特殊に對すると共に、 つた。 しかしそれは彼自ら云つて居 件 と見 彼 或はオ はこの外、 做 して居 歴史を以て事 I 普遍 ケ 普遍 た。 に對し . Ø 恰も 彼は ところ 如何

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの(船田)

3

ても明 的なものを意味する。 遍と云ふことを、 のも、「 聯せるものを一體と見れば、それは全體である。勿論この關聯は個々の出來事のみに限らるべきもので であるとか、der 民族と民族とが關聯 はな 普遍と云ふことが彼に於ては少くとも二樣に解せられねばならぬ。 して存するのである。この關聯せるものから見れば、個々の出來事は何れもその部分である。 の普遍である。 場合に於てさうである樣に、この場合に於てもその精確なる概念規定を與へて居ない ねばならぬ。 ことである。 ても等しく常に注意せねばならぬとは、 ري ه かである。 如何な 或る關聯せる全體が他の同様な全體と關聯して、より大なる全體をなす。時代が時代と關聯し、 。る民族 從つて彼にとつては普遍と云ふことが特殊と同程度に於て重要性を有して居たものと云 彼から見れば、 からばその普遍と云ふことは如何なる意味に解せらるべきものであらうか Zusammenhang des 第二の普遍は直接知覺することは出來ない 上述 も他の民族と接觸せずして存する」ものはないからであつた。 Ļ この場合の普遍は個々の の如く解したと云ふことは かくて世界史的全體をなす。 個々の出來事は決して孤立して居るものではなく、 Ganzen 彼が教壇上よりも、 であるとか云ふ様な言葉の彼によつて使用 もの das Ganze に遍通なものと云ふ意である。 彼が歴史研究は世界史的でなければならぬと見た かゞ であるとか、der allgemeine しば!~その學生に說く所であつたと云ふ 個 K の現象を通し は部分に對する全體 それ 個人のいろく て直観 それ等 0 E せらる は兎に せら 12 是云 あ II. 彼は大抵 3 つるる精 角彼が普 又この開 ふ意味 かる くに徴 C 相關聯 この 0 は 神 T

特殊 て文化 直觀せんとして居たことが明かである。以上述べた樣に、 精神 國民 動は あ 聯を可能ならし ら見ても、 0 つて 為 るものではない、 が、し その個 呼 的 を探究すすると共に、 0 オ 文化 現 万 ばれやうが、 (Heinrich 象 B 彼は初めから内的な、 のと云 の方面 現象、 かしこの兩者は勿 人の精神の顯現である。 innerlich—so t Leo) はれ 例 るものは、 より云へ それは却てこの特殊を通して普通を表現せんとし 彼 いが常に やうが、 ば 風 の攻撃に對する答辯中に於て、 常にその心眼を普遍に向けて居たと云ふことはたしかで ば、 俗、 verstehe ich Leibniz-ein 論無關 念頭に この内 習慣、 その 生命と名付けられやうが、 精神的な、 的な、 精神 從つて行動の方面より云へば、 係なものではない。 かけ 言語 はそ て居た所のものであつた。 精神的なものであるからである。 普遍的なものを、 宗教、 れ等に 藝術等はそ 遍通的であ Allgemeines, 何となればか 己れの研究は決して單に特殊的な事實の穿鑿に 彼は普遍を二様に解して居たと見らるべきで 叉彼 外部に現はる」特殊的な の國民 によつて到る所に使はる る。 Bedeutung, 彼は既に一八二八年、 精神はそれに逼通的なものである。 カコ の全體を全體たらしめ、 72 に特有な精神の現象であ くる意味での普遍 B 0 しかしそれは兎に角、 72 Geist. と云 ある。 と云つて居る所か ひ、 8 ものを通 > 理念の名に äusserlich ~ よしそれ 普遍的 15 して、 ル學 彼 從つ THE は ょ 徒 z)×

ry て考察を進めて 2 てこの 7 普遍的 ン ナ 0 歴史研究の方法とその根柢にあるもの 行 なも かうと思 0 ふが、 -れか この場合、 歴史哲學に開 (船田) 先づことに注意しておかねばならぬことは、 係を有するものであるから、 今は更に觀點をそこにお 第一、 彼は

當時 見よう。 1 何に 述ぶる所より自ら明かとなることゝ思ふから詳細の説明は略し、順序として第一の問題から考察して 後者は 觀 Ò 歷 て居たか 史哲學に對して、 これ に反してむしろ歴史そのものに關係を有するものと見ることが出來る。 と云ふこととの區別である。 如何なる態度を採つたかと云ふことと、第二、歴史哲學そのものをば彼は如 前者は學としての歴史とその方法とに關係するも この區別は以下 のであ

今この鬪爭の內容についてはこゝに云ふを要しないが、兎に角彼の所屬は歷史派であり、而してその派 き最も激しく~ーゲルと相爭つたものであるが、それ等が又ランケの親しく相交はれる學者でもあつた。 括して指すものと云つてよいであらう。これ等の學者中殊にサヴィニーの如き、 當時二つの傾向、卽ち哲學派と歷史派と對立して、互に相爭ひつゝあつたと云ふこと、 る學 C と云ふこと等を述べて居るのであるが、こゝに所謂哲學派なるものはへーゲル及びへーゲルを中心とす たと云ふこと、又この爭ひを躬自ら體驗し、それが已れに又己れの發展に影響すること頗る大であつた、 の性質上より云ふも、叉その研究より云ふも當然歷史派に屬するもので、その代表者等と親しく交際し 歷 彼は一八六七年、學位授與五十周年記念祝賀會に於ける一答辭中に於て、四十餘年前のことを囘想し、 史法學 一徒の一 派 群より成れるものであることは云ふ迄もない。然らば歴史派なるものは如何。 のサヴ イイニ 100 アイヒホ ルンや、ニーブールや、シュライヤマハー シュラィヤマハ の如き學者たちを總 ランケ自らはそ それは要する gadegeau. の如

を先 こと L カギ あ あ rs カコ 5 T O 哲 つ 験的 72 觀察すれば、 Z は當然であらう。 學派と相容れなかつたのであるから、從つて又ランケもへーゲル等の哲學派に反對であつたと云ふ カコ < 演 r に構成 彼 耀 T は畢 得た は 的で 竟 八〇四 あ る圖式に照して歴史を考察するものであつて、 するものであつた。 Spekulation b ヘーゲル 構成的であつた。 然らば歴史派の、 五年の冬、 の所謂世界史の哲學なるも 는 Empirie 換言すれば、 「現代の特徴」について講演し、 の對 L 特 にラン かしそれは單にヘーゲルの 立に 基づく 彼 ケ は彼彼 0 哲 0 の所謂 は經驗 學派 ものと云は に反對 的史的 その方法は全然思辨的で 世界精神 ずる根に 构 その特徴の那 みではなく、 ば 事實をはな の本質 な らね 據 は那 からその カゞ 逸に n 邊に 7 今之を 存し 1 思 あり、 あ 發 辨 E る ラ 展 歷 1 72 b カコ 過 ょ 史 0 を明 先 研 亦 程 7 で 然りで 驗 を演 T 究 あ 歷 カ> 的 **つ** 1 C 釋 史 つ 72

成し、 13 Ġ 彼 を前提とし、 ある。この場 ので は 識 歷 あ 史 的 而し 行 る 0 てこ 哲學 かっ 動により、 <u>ح</u> 合、 彼 n n 的 にはこれ 考察なる 彼 から カコ ら人類史の 0 理 論 一性に從つて處理する所に存すと云ふのである。 を説明して人類 切を割り出 る 述 もの 0 方法は 發展過程 を以て、 すに ^ 1 ありとなし、 グ 0 を演繹し 地上生活 切 w のそ 0 可 能 たの れと同じく叉先驗的、 0 なる 目 T カコ 的 < 歴史的現象を離 あ る。 T はそのこゝ 彼 然らばその は カコ 7 に於け る概念として 語を換へて之を云 n 思辨的であつたので 所謂 先づ一 る Weltplan 切 0 つの先験的 Weltplan 捌 係 とは を自 ば、 あ る。 な 概 由 如 彼 念を構 何 る では人 į 卽ち な 或 る 0

世

 $ar{h}$ 

カゞ

爲

め

に、

全歷

史

0

發展

を論述して居るのであるが、

(それ

が彼

の歴史哲學觀と稱せらる

s E

Ø)

T

ラン

ケ

の歴史研究の方法とその根柢にあるもの(船田)

第四號 (至之)

7

理性 敍ぶ は る 理性 上生活 あ 人類 類 所 事 が己 3 實 史 0 ることそれ Ø 7)3 を俟 本 を五期 に於け は 意 れの本質た 質上、 T 4 識 かつ つ迄もなく、 n 0 る目的 は 時 に區分して、 72 自體 期 人類 無 論 る理性の自覺に到達し、 否、 充分 は 理性 が實現せらるとなすのである。彼はかくの如き目的 がこくで目的 如 理性 彼 何 なる説明なくして 0 理性 に収 術 1 發 の本質上よりして先驗的 の時期となす。 2 展 が本能として働く時期、 T すべ とする所 は 顧 Š カュ るを要せざる所で を論 では は讀者の かくて理性の法則に從つて自由に行動するに到る時、 L ない U からばそれ等の各時期は 72 B から、 理解に苦しむ所であらうが、 12 0 知られ で、 理性が權 之を省略してもよいと思ふ。 あ この場 つ 得 た。 威として働く る もので 何と 合、 々見地から理性の本質に基 なれば、 如何なることを意味するもので 事實として あ つ 72 時期、絕對的解放 し 彼 カ> 5 かし 0) カコ T 歷 ら見 詮 あ 史 7 -3: \$2 は 1 る ば 亳 C 史的 もそ 所 7 の時期、 その地 0 說 發展 0 彼 はま 顧

述 何 思 であった。 0 とな 辨に 要求 べた様に、 以 Ŀ n 述 よつで構 を絕對化して出來た主義とか主張とか、 ばラ べ 彼はフンボ tz 彼は ンケ ヘーゲ 成せられた 主 から見れば、 義 ルやフィ アトと同じ様に Treiheit 主張、 る理 ヒテ 理論、 論や、 何よりも先づ彼等の取れ の歴史の哲學 學說 學説と云ふが如きものに拘束せらる、ことを欲しな は 云 的 der Ansicht よしそれが哲學的であるにせよ、 ふ様なものは云ふ迄もなく、 考察は、ラ る方法は誤つて居た ンケの を欲した。 到 底反對 然るにフィ せざるを得ざる所 からであ 事實 すべ E Ľ ナや てそ 基づ る。 日に 0) カコ カコ ーゲ 排 7 C 擊 た。 先きにも あった。 する所 單. 、等は 刹那 なる

史研 來 學 T 學 借 遍 C る 0 辨 哲學 きことで は **Z)>** る 歷 0 りて 程 K 的 ね 究 B 史を形 行 度に於る フ なも よつ ば 的 7) きも によつて史的發 つて 來 加 特 ン な 思 7 學 T 殊 T ボ は 5 辨 0 る ンケ 12 0 1 成 普遍 を前 W は 的 T な 仕 ØQ によつて出 でもなけ も頼 する。 なら なら ŀ な 重要性 の歴史研究の方法とその根柢にあるも かっ 方 は 提として、 ものと、 彼 は、 つ 的 るべ Ø Z 'n 72 な概 から見ればこの後 L と云 0 ક を有 飽く迄も事實を主とする彼 れば、 展 か カコ 論 0 念を構 勿 來た普遍的抽象概念から出發して、 の中 らざることを意味して居る。 し彼 であ Z £ o 文 論 L 0 Z 72 彼 等 から得らるべ 又これ等の學 ラ 歷 つ 關 は普遍 n 各 成 Ó 史記 た。 ン 聯 Ó カコ カ> とを注 ケ で 5 Š 述 この點に於 あ それから特殊 7 一天的方法こそは眞の意味に於ける學 的 る 亦 家 切 なも ることは上 誤 意し 0) を演繹する方法 きものである。 或 者 謬 任 のそれ 0) より 務 7 (船田 る 如 親察す B 12 7 0 < Ź つ કું 自體 經驗 0 的なものを演繹すると云ふことは、 に 思 K は Ç 述 辨に 彼に 哲 て し Ź 彼 く に反對するも 的 と云つて居る 學 は Ġ に 72 彼は思辨的 t よれ 說 通 0 あつ フ 0 後天的方法とは、 歴史を先驗的に構成せ つ P Ħ に b ン て案出 ば VI. 直 た ボ である。 普遍 肺 於 觀 0 W 學 7 で ŀ せらるべ のでない。 思想の追求 すべ 說 カゞ 的 とその あ 普遍 る。 な に逃避 彼 の方法であつ 3 ٢ Ġ 0 B n を求め 見解を さら 0 彼に 反對 まなな は 0 は Ļ それは特 と歴 T 肺 歷 したが よれば 0 んとし に B 學. 史 んが カコ で 對 史研 研究 や哲 な くてこの に 歷 72 蹠 ~ 爲 哲學や神 この普遍 は 殊 す 史 12 的 究 學 は め 研 むしろこ 的 從 0 る T とを對立 Z 如 1 カュ 13 究 つ あ C b 、哲學や言 は 6 說 何 ģ 0 T あ **つ** 却 借 0 な 學 1-的 爲 0 12 בנג T 3 從 b C 0 と同 בנל 13 す と云 0 沙 歷 哲 T 神 普 2 あ 6 ģ 思

如く 少 なることは、 L なきも 迅速に所有せらる 後者の のなることを説けるは一八二七年 前 一八三一―四九年の一般感想錄中に見えて居る所である 者に 此 して一層多く吾人を真實在の認識に接近せし いものではなく、 事實 の書簡 一の精治 1 細なる研究を俟つて後、 見え、 叉普遍的な眞理 3 るも は、 0 初めて得らる 叉その 7)> 0 思 諛 辨 窓に 7 的 望 思 陷 孙 想 3 南 -るも 0 1 る H カゞ 0

徴して 經驗 組織的 furt で t 方法には、 12 72 あつ 所 以 かゞ 初 で 的 上述べた所によつて、ランケは當時の歷史哲學、卽ち先驗的、 め た L ģ は T に研究し、 僧 0 Gottfried Hermann とIKるが こと 明 かし 院 な あつた。 7) 断然反對の態度を取つたと云ふことは明かである。 附 カコ 1 Z は、 屬 で つ 赴任しても、 あ tz • 0 0 好 學校 彼 る 彼 ינל 自ら む所は は 0 彼 くて後次第に歴史研究に入るに至つたのであるから、 (は特殊: 抽象的に事物 L Donndorf カコ über jedes しこの場合又彼の青年時代に於ける教養と云ふことも忘れて その擔當する所 むしろ文獻學、 的な & Schulpforta ものに對して非常なる關心を有した。 の本質を究め、 如き文獻學者に負 besondere Leben 古代學の方面に は古代文學 に學び、 これから論理的演繹を試みると云ふことは、 freue ich mich meiner ふ所 史であつた。 進んで Leipzig 大學に入り、 カジ あつた。 尠くなかつ 彼は思辨的たるにしては、餘りに 普遍的概念から歴史を演繹、構成 ~ 而してこの方面 一の頃 これ た様に見える。 その方法は自ら實證 よりして彼 Natur は彼 の本性の然らし nach に於て 籍を神 は古代の 更に彼 と云つて居 はならな 彼 學 13 は 的、 部 質證 E t 史 に Frank. でする る 0 經驗 30 る 的 所 好 彼 を

ば、 Schlüsse gehen alle a posteriori. と云つて居る所によつて明かである。 に角、 B 二三年、次弟ハインリッヒに與へた書簡中に於て、auch will ich das apriori fahren lassen, 彼 代表する一 學 的 的 ばならぬ。 と同 くてその影響を蒙ること尠くなか せんとしたのである。 とした。換言すれば彼 は 0 研 ラ ン 世 究 彼の青年時代は一面、 時 後天的たらざるを得なかつた。實際、彼は初めからしてかゝる方法によつたことは、已に早く一八 かくして得られ 界の一 E 彼 カゞ 12 ケ L 傾 歷 0 カコ Spekulation 大領域を成すに至つたのであるが、 史研究 學 0 カコ 向であつた。 し の方法は後天的、 Heyne や、Wolf や、その他多數の傑出せる文獻學者によつて試みられ、 彼 の方面 tz は しか カコ は特殊なものを通して普遍的 る眞事實を通して、より深き、 に對する 7 非常に哲學的であつたことは云ふ迄もないが、しかし他面に於て るにこのことは存在としての歴史に關係するものであるから、 る方法によつて、單に事質の眞理に到達する丈に甘んじたものではなかつた。 ランケもこの傾向に屬する一人であり、從つてこの方面の大家と接觸 に於ては、 アン つた。 經驗的ならざるべからずとの信念は、 たし ラ 然るにこの方面の重んずる所は 1 ゝヾ゚ かに テーをば一層高めたものと云ふことが出來やう。 實證的であり、 かの哲學派に對立した歴史派なるものも、 なものを、 より高き哲學的 real 經驗的であり、 なも な 更に時代一般についてこれを云へ この影響によつて確 のを通して Empirie 否 宗教的 客觀的であつたと云はね であつたのであるか ideal なあ かくてそれ な る 次にこの方面 denn もの Š ぬめられ この領 は又文獻學 それ 0) を得ん を直 meine は鬼 城を 觀 t)> 办多

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの(船田)

カレ

第十五卷

に向つて進んで行かう。

四

真の歴 哲學 6 彼 2 目的とする所に達せんとするにあつた。されば彼は己れの歴史研究を以て哲學的ならずと批難するもの で、その間に何等の矛盾も存在しない。 11 目的とする所のものにも反對したのであるか。否、決してさうではなかつた。むしろ彼はこれを正當 むことに反對したことは、すでに上に述べた通りである。 て居たのであるか。 ฆ は 然らば彼は存在としての歴史、 致するもの、」 して 歷 の要求は 一史研究と真の哲學とは矛盾するものではない」と。 彼は當時の哲學的主流たるフィヒテや、 史哲學を當然なものとして許したのみではない。 認 めて 避くべからざるもの、自然的なもの、人間的なもの」と云つて居るに見ても明 居た 從つて又人間史の研究 これ のである。 を明かにせんが爲めには、 このことは、彼が一八三一――一八四九年の一般感想錄中に於て、「歷史 即ち歴史認識の客體、 彼は云ふ、「世人は往 も畢竟哲學で ヘーゲル等の觀念論 彼の哲學に對する態度を今一度考へて見なけ ある。 これ 或は歴史そのものに對して如何なる解釋を下し 然らば彼は哲學の目指す所のもの、 彼の歴史研究も、 を目的と云ふ點より見れば、 々、哲學派と歴史派とを區別するが、し 即ち この 的哲學のとつた方法で、 兩者はその目的を その動機は實にこの哲學の か 「すべ 歷 である。 にする 史に 或はその れば T のぞ Š の學 のこ かし な 0)

自然 分に 然物 學 riae et 後 學 拘 に は 0 1 る 1= 現象の 普遍的 すとに共 極 らず、 的 對して、その當らざることを辯明し、 0 述 個 1 する 0 興 めて 0 目 ベ K politices cognatione atque discrimine 源 形 72 宗教 的 0 泉に迄 態を 緻密にして精確 B 事質 B 根源 通 その 所 で 實在 は 的 で な のとすれ 刻 關 13 あ 的 る目 哲 或はその根 も進み 銘 永 的 る カコ 眞 學 心であると云つて居る程 に描 久 か、 な つた 理 的 的 的 ば、 精 Ŗ 0 12 行くことゝ 神を認 カコ ts L 0 闡明と云ふことを非常に重んじ、 何 最後 柢 法 Z で なるを期 んとする カコ この普遍的、 直觀、 しこの あつた 則 に を究 0 存する普遍 t 目 する所に存し る 事實 Ĺ かゞ 的は 次 に各で め か。 る。 んとするも 實在的 の探究は、 哲 L カコ むしろこの事實に基づき、 余をして歴史研究をなさしむるにいたれるものは、 < 歷 カゴ なか 的 學 である。 史研究 # てそれ等の各 L Ó 實在的 他 た に なものに到 目 0 於て 面 0 0 的とする所 tz 一であ も亦 叉彼が C に 彼にとつては第一の、 のもその 於て 次の様に云つて居る。「自然科學は、一面に於て なもの あ る。 る。 カコ にそれ は 歴史卽ち事實の探究とさへ規定し < 達することが、 ~ 彼は一八三六年、 0 > 0 爲 認識 如 より高尚 カコ ģ めで 15 \<u>'</u> しこの場合 0 n 歴史的現象を通して、 C は あ 0 卽 の色彩と、 あ 9 哲 現象その なも る。 ちこの研究 た。 學 直接的目的でこそあ その 的 に 然らば 方法に のを熱望し、 歷 は 目 史研 正教授就職 ક 形態とを 的で 0 そは 究も哲 は、 0 彼 は、 事 なけ 認 0 件 防 識 極 庾 その根 切 自然とその 論文、 0 n 學とそ C 謂 力 順 Z. 0 たこと ば な 反 歷 列 質に、 75 流 ñ 了 對 史 De E n 柢 研 6 0 L これ努 展 出 1 Z は Ħ 却 究 72 histo-各部 Ž: は つ 先 只哲 0 的 てこ と哲 C 自 る 3 最 す 彼 E Š

V

ケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

(船田

あり、 もの せられて居るのではないから、 にこの kelt ist, das einzige sei, worauf ich in diesem Leben zu hoffen habe.° 所謂die verborgene Ursachen der Begebenheiten 或は das tiefste Geheimnis der Begebenheiten の存在する ياوني w んとした ことを確信し、これに到達することを以て、歴史研究の最後の目的として居たのである。彼は云ふ。 却てそは始源の探究に進み、 (Idee) とも稱して居るのであるが、しかしこの理念なるものは彼にあつては一 るしと。 to ネ ギーと云ひ、 N は ギーや、 何で 生命を生命たらしむるものは、彼によれば精神、 カ> 以上の言によつて明かなるが如く、彼は一切の根柢に、 る īfīj の力は道徳的な力 あつ してこゝにその最高の價値をおくにしても、 dass die Enträtselung gewisser Geheimnisse, das ans Licht Bringen einer Sache, die verdun-切の出來事の、 或は力とも云ふ。 72 クラフトでないことは云ふ迄もない。 かっ ラ **ン** ケはこれを種々なる言葉であらはし、 (moralische Energie, 最後の隱れたる、 人類を導く最も深遠、 これは後に一括して説くこととし、 しかしこの生命は單 神秘的な原因、 moralische Kräfte) である。 奥妙なる生命の活動に迄、 彼 に生物學的な生命ではない。 L の所謂生命は人間 Geist かも歴史は である。 卽ち一切の現象の根柢に存する質在的 直接知覺を絕したる實在的なもの、彼 或は之を端的に生命と云ひ、 こいではしばらく精神なるもの כנק 從つてこの生命は 然らば彼が解かんとし、 くる仕事に終るもの に特有な生命で 透徹せんとするものであ 義的な見方 しかし彼は又これ 又それ ある。 は物理 に從つて使用 精 にあらず。 咖 或 的 を理念 は 啓示せ 學 生 に觀 命 カコ 的 "Ľ 011 ネ な 0 る な C

等々、 點を Z あ ひ、 Ď お 「人間」 と云つて いて述べ M て現 Z 0 よう 居 實 B る 的 0 と思 かゞ な歴 > 內 史は、 4 ふのである 部 n に 等 於て發展 皆その は 如 かゞ 上のことを立 顯 し、顯現し この 現 12 精 外 なら 神或は 證す 來 る精 Ø 精 る Š 神的 ક 神 0 C 0 불 生命、 T あ あ つ るると云 ひ、 た。 مر. سا 叉歷 彼 れ實に彼にとつて は は 一史を以 ね 世界 ば な T 5 にこ 現 一精 Ø は は n 媊 歷史的 來 0 表 る 迅 精 實 聊 なり 在 ٤ C

研究 研究 れば、 則 世 性 跡 ちその カコ L う得ざる を追 は る に從 かゞ そ はこの の立場よりして、 のなすべきことでは 彼 如 歷 n ふと云ふことに Dasein 1 \ \ 史 は £ ものとな ょ ものと云ふ意味に於て必然的なりと云ふことは出來 0 如何 樣 れば只因果必然性のみである。 精 發 に を信じては居たが、 神 展 なる内容を有するも 精 歷 0 過 |史研究の方法とその根柢にあるもの 神 して居 本質を先天的に規定し、 程 を以 な は經 到底なし得る所ではなか ない。 る。 る て 一験を俟 歷 からである。 又その 史的 む 質在 しろ史學 たずして云 しかしその 發展 のと見らるべ と見做して には 從つて彼はこれ Ø それは それ 必然性 任 は 何 務 つた。 n から論 で きで 居 以 得ること」な 兎に角、彼にとつては、 あ は 72 るか 認 あ カジ 現象の方面から出發し、 何となればその 理的に歴史を演繹、 を定義 め 6 得らる 然ら か。 (Wassein) ない。 ぼこ 9 し得ざるも 彼 ` は勿 かゞ カコ 0 を先天 くて彼 本質 精 論 精 し 加申 神 カコ 0 構成すると云ふことは、 カラ 的 カコ カジ 0 > しそ 先天 0 發 0 的に云ふことは、 る 本 觀 これを通して、 展 極 抽 質 કુ のに知 念論 に於て認 n 象 力批難した歴 12 0 は 的 0 如 的 槪 存 何 り得 歷 渝 念 在 な **处**哲 めら 理 の下 る す 的 3 ること、 ķ, その 學 3 史哲 8 範 1: 彼 0) 者 厛 Š 0) C 7 根 歷 ٤ 0 业 0 12 學 歷 あ 然 柢 史 な 6 卽 法 史 0 る

ラ

ン

ケ

0

(船田)

金沙

味で云 Diesen erhabenen Zweck teilen dann Philosophie und 彼は云ふ。 ٤ 1 存す な る精 ふので Wie denn auch sei, 而してそのこゝに至る時、人間史の研究は哲學とその目的を共にすることゝなるのである。 꺠 ある。 を直觀すべきものである。 しかしかくる方法で精神を直觀するに至る時、 es bleibt immer 彼が「余の推理はすべて後天的である」と云ふのも、 die Aufgabe, sich zu reiner 歴史の最後の目的が實現せらる」こ Anschauung zu erheben. かゝる意

Menschenhistorie

般的、 Theorie である。 ことに努力したと云ふことであるが、彼の發見し、言ひ表はさんとした所のものは、この對象に內在す ģ なものを摑むことである。 なる概念よりなる乾枯びた圖式」ではない。かゝるものは眞正の意味では Theorie と云ふことは出 い。Theorie の本來の意味は直觀 (Anschauung) である。特殊的なものを通して、その中に存する普遍的 0) よれば哲學は 以 は普遍的なものをその中に包藏する」からである。彼は特殊的な事實によらず、思辨的に、單に一 上述べた所から彼は哲學と云ふものを如何に解して居たかと云ふことが推測せられ得ると思ふ。彼 抽 象的 その法則を理解するものを lebendige Ansicht と云つて居るが、これこそ真の意味に於ける 形式にのみ拘泥するものを mechanische Lehrmeinung となし、これに對して、 Theorie である。しかしながらそれは「思辨によつて得らる、結果」 彼 は云ふ。「アリストテレスは、 何となれば普遍的なものは、彼によれば特殊的なもの、中にあり、「特殊的な その云ふ所によれば、對象の神的なるものを理解する では ない。 事物 の中に 「僅少 來な

に

なけ 象の る n る言葉である」と。 哲 ば 學 特 れば 中に存するロ 殊 は 具 0 ならぬ。 IE 事實 な る から出發して普遍的なものゝ直觀に達せねばならぬ。歴史も亦然りであ 歷 von oben nach unten ではなくして、 Z, 彼はアリストテレスの方法を以て已れの方法とした。 史と矛盾せずと云ふは、 スであつた。 哲學の道は普遍より特殊への道ではなくして、 カコ くる意味に於てである von unten nach oben 彼の求 でなけ 特殊 めんとした れば ょ ら背温 る。 なら もの 彼 Ø 办多 眞 の道 換言す は 正な 對 C

世界 0 は 自 互に Menschheit などとも云つて居るが) 彼 カコ 7 基礎をなすもの、 し 我 彼 0 民 作用 所 カゞ 史 彼 は 謂 と國家とを、 存 0 は 現 der 基 實 ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの 在 世 ے 界史 體 する n 的 Nation 關聯 でなけ を な ので 歷 Weltgeschichte (彼 ずる限 史 直ちに同一 從つて國家は國民なくしては存 あ 或は單に n ゲ 0 る。 ば 根 ル 低に、 なら b の に於 所謂 ح 0 ØQ Nationalität 視するものではないが) 國 T 實在的 民 然るにこの のみ存し得るのであ 世界精神」 はこれを又 精神 は、國民であるとか、民族であるとか、或は國家と云ふが なものとして精神を認めて居たことは上に述べた所であるが、 0 돌 個 別性、 國民や、 と云ふ様な意味で、 Allgemeine Geschichte, Z 語 立し得ざるもので を関々 從つて又國 國家にはそれが〜特有な精神的生命、 3 を强調力説すると云ふこと、 かっ 使用 5 L 家 從つてこの國民、 こて居 普遍的なものと解しては居なかつた。 0 個 Universalgeschichte, Geschichte der るが、 あ 體 る。 性 (彼は これ 勿論、 カジ 或は民族、 彼 實 Nationaler 略言 に彼 は ざ 5 す VI. 或は ri 以 如きも ょ 或 Geist 13 2 n は 國 IT 特 國 Z 家即 國 b 有 家 0 家 或 0 な かず >

(船田)

らは 精 3 神的 根 本 n 7 實 思 居る 體 想で 說 から、 あ は、 つ さ カコ 少しくこれについて かゞ 0 Historisch-politische 2 れが この雑誌 述べ 0 最終號をかざる Zeitschrift (一八三二——三六年) て見よう。 Politisches Gespräch に於け に於 -る諸 报 論 ら 領洋 文 2 カラ U (= 난 あ

分離 實在 象 以 さうであ 1 的 獨 7 0 な 彼 ょ 概 飛躍 に過 立 1 13 念 歷 n 世 ۲ ぎな 真の意 つた。 ば カコ ラ Z か なくし 史認 る 0 ら特 個 各 < n 國 7 カゞ S 識 體 地 環境 彼によれば初めに普遍的なるもの 種 殊 て、 家 味に於て實在するものは の方面に於て普遍主義に反對した様に、國家と云ふものを取扱はんとする場合に於ても、 球 從つて 或 は R 的 0 特殊 は 何 0 な國 な 表 異 精 る國 n 面 に 特殊的な B なるによつて、 家を演繹することは不 神机 それ 家 は 達することは 的 海洋、 カジ 實 體 成 に 立する もの 特有 C 河流、 ある。 から、 ない 特殊化 特殊的、 に至 Щ 11 從 特殊 來ない。 脈 普遍的なものに達することが出來る 0 0 1 たし して、 可 7 0 よ 個別 傾 能 が實在し、 國 つて切断 ڪ と、云ふ見解にも反對せざるを得なかつた 家 向 で れを國 0 個 あ 的なものであつて、 る。 外 本 R 部 源 0 せらる これ それが特殊化して個別的なも 異なる國民 家について云へば、 的 12 對 な す を國民に 7 固有 3 カゞ 活 故 動 0 カジ II, 普遍 ついて云へ 生命を有するもので、 生ずるので も、その これ 的なもの かぎ 國家と云 によつて又人間 內部 普遍 は ば、 に於 には単 な る普遍 人間 的 のとなるので 1 H に形式 な ので 3 B 從 性 心的、 本 は當然 0 **つ** ある。 て彼 般 7)> 的 抽 6 15 カゴ

彼

1

皆この生ける、

Z

れに内在する個別

的な精神

的原理に基づくものである。

L

カコ

しそれは國家

に於て然る

は

B

は

傳達 義、 律 る。 從つてこれをそのまゝ國民性を異にする、 72 來 た所 て盆 由 0 B は る 0 特 0 みでは E 主 通 カ な 75 々その 有 用 ر. ا 説 ्र 卽ち人間 法 義 0 し得る程、しか 10 言 な精 に反 理 ġ 明することは出 律 語 すと見做す見解に極力反對した。 解 <u>پ</u> な 0 を例 B 對 これ vo 特質を發揮せしむることこそ國家の任務でなければならぬ。 は 神 せらる 亦 n せん 的 は 然りで、 と同 1. ٤ 獨 理 生命を、歴史を通じて認識することこそ歴史研究の任務である。 によつて 同 逸國 じく **S** 性 とする所 つて之を云 < 的動 のことは又、例 粗 で Z 民 來 藝 雜 の本質 物で、 も彼は ない。 は あるが、すべての文化現象は何れも個別 術 なるものではない。」 単に に 12 存 へば、 關 その點に於て一樣である。 概括 思辨 を歴史に 思辨によつてなれ する L 72 ^ 0 して之を云へば、「普遍的 Ø ば言語、 般的、 一產物 般 C 彼によれば よつて明 あ 的 他國 る。 T 抽 哲 は 象 藝術、 學 彼は 如何 に移植することは不可能である。 T 的 的 る抽 カコ ंर्र 理 文 艺 1. なる國家にもそれに特有 精 論 法律、 法 し、 2 換言す 象的な理 カコ カコ 神 5 5 從つて一國に行は Aber überdies scheint es mir unsere eigentliche カコ 宗教等の文化現象についても云ふことが なるものは < れば 特殊 な 特 理論 て當時佛 論 殊 的な、 普遍 から出發することに 0 的 か 鎏 な、 ら特 椭 的 生ける精神的 彼が 國民 蘭西の方より迫り來る革命的自 な法 生ける言語を理 をば演繹すること 殊 歷 15 カジ る 律 的 精 史·政治雜 なも 發明した形 0 、政治、 又これを認識し、理 彼は十八世 加州 槪 的 念か 0 生命の 如何 生 0 命 法律 解 直 6 元式を他 誌 に反 办多 は 觀 は する 發 特 に於て試 は 紀の普遍主 存する。 不 1. 現で 又 對 達 殊 Ħ] こと 卤 他 C す 能 的 解 民 國 あつ 3 は 出 C な 3 ۍ. اسا 道 1 法 出 1 あ 來

ケ

の歴

史研究の方法とその根柢にあるも

0

(船田)

は は決して偶然ではない。 る するもので、 にしても何れも該民族に特有な精神の特殊化して現はれたもの、 疑ふべからざる事實である。彼によれば一民族の文化現象は例へば言語にしても、 神 云 對 は に へば文化 話 に根ざせるものなりと主張する。 彼 Karl Joh. Friedr. von Roth によせたる書簡中の一節であるが、 その意 此互に 切の文化現象、 に現 den deutschen Staat so zu sagen zu entdecken, seine Grundzüge in dem は を讀 味する所を同じうするものと云ふべきである。かくの如くこの兩者の思想に はランケの一國民の發明せる形式は、そのまゝ他國民に傳達せらるゝものでないと云ふこと 現象は何れ 一致す n 任意に作られ、 た思想は んで想起するもの るか 殊にはその専門とする法律の、 کی もこの らで サヴ サヴィニーはランケの最も親交せる一人であつたからである。 これは彼が該雑誌の編輯を引き受けた時、一八三二年寄稿を依頼せ あ 1 る。 任意に脱がれ、任意に着換へらるべき衣服の如きものではないと云つて居 國民 <u>=</u> Ī は歴史派の代表者 Friedrich Carl von Savigny である。 精神の 即ちラン 0 今こゝにサヴ 思想と相通ずる所は尠くないからである。 發現なりとなすのであ ケは國民精神を一 1 よつて以て説明せらるべき基本 910 0 説を詳説する遑が 切の文化現象 るが、 從つて叉その民族と共に成長 それは兎に角、吾人がか サ ヴ の根柢 1 な 否 i かゞ B 12 Vorhandenen aufzufin-宗教 概念で その根本思想に於て 亦これを以 あるもの、 彼 ラ ン 一致する所 にして 0 何となれば あ 所謂 0 つたこ ケ自らの言 Politisches で民 民族 L 逆に之を 變化 族精 藝術 とは ある 精 カコ 0 咖

想の、 兩者間には と云ふのであるが、それがサヴィニーの名をかりたものとも當然見られ得るので 如何 ふ所によれば、彼はサヴィニーの弟子ではなかつたが、その著書をば夙に研究して居り、且つ三十年來、 1 週 I に 深か 度は その中に見出されると云ふことは、蓋し當然のことであらう。 で あり、 つた 親交があつたのであるから、 相會するを常とし、時には又日々相見えたとも云ふことであるが、これによつてもその交際の 躬自らもその雑誌の寄稿家の一人であつた。 かと云ふことが察せられやう。 ランケの思想を分析すれば、 現に該雑 誌の編輯者としてラ 叉その政治對話 その一要素としてサヴ Ø > 人物 ケを推奨せる ある。 は Carl カコ < ٤ B 1 Ó 如 design design 0 はサグ くこの 的思

mus 如く、 觸すれば、 精 素質を發展せしむ 神的 カコ TS. 0 を以て、精 實體 ・述べんとする所は少しく横道にそれたが、彼によれば各國民、各國家はそれ自體に於て存在する die こ、 Natur に であり、 そこに に與へられた 吾人はカントを引合ひに出して見ても、必ずしも不當ではないと思ふ。 神 des Menschen は必ず の發展に缺くべからざる條件と見て居たのである。 る手段は 諸種 る素質が完全に實現すべきことを以て、歷史發展の終局と見做し、 の文化現象はその顯現である。然らばこの精神は如何にして發現し來るのであ Antagonismus Antagonismus であると云つて居るのであるが、ランケも亦この であ る からである。 が生じ、 葛藤と闘爭とがあらはれ來る。 この関 **命中に、萌芽としての、** 彼によれば國民と國民とが互 或は 何となれば カント 素質としての精 は知らるゝ Antagonis. zu strei-に接

る

ラ

ンケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

(船田)

らで 或は世 な な 0 0 意 膝 3 0 C 꺠 創 と関 識 以 於 カジ あ 造物」 彼 ば 4 C 現 界史 らる によ 現 如 單 例 争との間 は 何 E 0 は れ來るのである。 る。 n なる國民も常に他と關聯して存在 的ならざる 理 文化 つまり ば英吉利、 7 ば 由 に 現象の 個 に に 至 L 基 歷 々の カラ るもの あらは もそれ づ 史 みで 國 ~ < 0 伊 家や、 產 からずとか 太利 で Ø n 物 は 來 C あ は決して平和にして、 彼は云ふ、諸種の文化現象は、 る。 ない。 あ で 0 るものである」と。 國民 國 る。 あ 何となれば、 る 民 かざ 云 L 性 カコ 國民性と云ふ らで と云 相關聯して全體をなす限 Z カコ 彼 L の主張 又同 ふか あ る。 し、 時 如きもの 國民と云ふが如きもの 障害なき發展をなすもので 丽 P 彼 しか に、歴史研究は常に普遍 が如きものも してそれ等 は獨逸國民の特質 亦この しこの闘 は 各國民の 理 土地や、 質に b かぎ 曲に **争によって而してその中に** 耳 に於て世界史なる 特 基 に 「種々なる民族系統 づく 人種 は 殊的 相爭 E に着眼しなけれ の産物 生活 歷 自然ながらに ひ ものと云 更に 0 はなくして、 C 7 即し、 發 よつて發見せんとし ではなくして、 j 14 展 0 L ね 非常 カゞ T ば 存するも 0 ばなら 閉 現 考 行 連 な B 邻 は 綿 班 6 H B ØQ n 不 Ð 大事 1 聞i な る *(*) 來 とか、 於て 何 C るも る Į, 形 然 變 ٤ 12 11 בנל

であ 槪 以 念の下にもたらされる程、 る。 E 述 カコ < 72 樣 0 如 に へ文化 精神的 は精 生命は世界史的闘争によつて發現し、 神 的 單純なものではなくして、 生 命 の客觀化せるものであるが、 これをその内容より云へば、 客觀化する。 L カコ しこ の精 この客觀化 神 は 世 彼自ら云つて居 上 る精 に 述 神 かず 12 文化 樣

顯現し來るや、吾人には知られざる法則に從ふもので、人の考ふるよりもより神秘的にして、 は出來ない。「人類は發展の無限的多樣性を己れの中に藏し、而してそれが漸次に顯現し ふことは保證し得ない。又それが如何なる順序をとつて、 である」と云ふのも、 ざるものであるから、 向 ものであると云ふことは出來ない。 示すもの る樣に無盡職であるから、その本質は一語では到底完全に言ひあらはせない。 入自 由 な で る發展 あ る。 は皆これに **雷に藝術や科學の** 以上のことを言つて居るものと解することが出來やう。 現在吾人の知れ よつて包擁 みで 將來に於ては吾人に未だ知られざる、 る かせられ はな 或はこれ迄發現し來れ v る。 宗教も國家も法律も道徳も、 L カコ し精 何時、 神の本質或はその内容 何處に現は る文化の諸 新しい れ來 相 それ 否 から るも 文化 文化 精神 は は又種々なる形 先 0 0 一來る。 現 T 天 0 的 全內 的 諸 あ は る n 力 より偉大 但 حرالا な 規定し得 容をなす 0 しその も豫想 理 相を 想

## 五

宗教觀と密接 命なるもの べきことを、 以 美 余は存在としての歴 1 観點を な關 云 ひ盡 係を有り した おいて述べ と云ふことは するも 一史が、 て來たつもりで Ó 7 ラ あ 出 る ン か、 來 ケによつて如何 75 1 L ある かしこのことには未だ少しも言及しなか 體この か、 L に觀 精 カコ られ 神 しそ な れ丈で るもの たかと云ふことを、 は は、 勿論 ラ 1 ケに 未だ精神 於て 精 0 神 tz 或は は、 1= つい 更にこの 特 1 7 神 その Z 的 Z 生

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるも

0

(船田)

towns

學

するものであるから、こゝではこの理念なるものを考察しながら、 檽 C L 考察の中 方 は 面 歷 史的現象 C らも觀られることが 引き入れな の根柢に存する實在的なものとしてのみならず、 かつた。 出來、 然るにこれ等の方面 又事實、 觀られて居るのであるが、 हि בלל の先きに留保して され それ等精神について、 が叉現實的な歴 L カコ おい しょ 72 Ø 理念に 方面 史に まだ云 も亦 於 を開 X 7 は 係 な を有 明 觀 カシ 化 7)>

從 所の カコ カゞ と い કું つた カコ つて 二つの方面、 らで あるやうに思ふ。 は 0 その 道德的 B 方面 は、 てこの ある。 先きに ラン 0 見方、 を附 決 で ケの あ な し 所 然らば彼はこれを如何 6 述べ て 謂 工 けたして行 卽ち一方に於ては、それが何處から來たものであるかと云ふ、 或は 理念なるものを問題とせんとする時は、 ネ 理 義的 72 從 念の名によつて呼ば w 若し然らずして漫然之を見れば、 その着 所で ギ つて 1= 彼 あるが、 ~C. 解 かうと思 あ 眼點を異にする所からして、 の説 せらるべ る ٤ < L か、 所 क्रे きものでは なる方面 カコ は しそ 精 る 理念説とも稱せられ得る程 咖 ゝものは、 n 的 7)3 な力で、 は常にさう云 ない。 ら觀て居た あ ランケにあつては、 その ると 勿論 特にこの見方の E 理 ので n カコ 彼 ふものとしてのみ使用 念說 はこ が又異なる意味 云ふやうなものと、 あ る に相矛盾する所あ te のもので か。 。 を その全集中隨所に見受け 精神 私 相違と云ふことを考 見に ある VI. C 所謂起源の方面と、 よれ も解 か、 あ 理理 せられ るとか、 L ば る 步 彼 かしこ カジ B 同 はこ 如 n T 義 居 生命 き觀を呈する 1 3 の理 見て 虚 れを少くと 0 るの す C T られ る で 念 あ あ 居 必要 は な 72 B ٤ 3 3 13

に於てはそれが現實的な歴史に現はれた方面とから考察して居るものゝ樣に思はれる。

せしむるものは人間の衝動である。しかし今この人間の衝動と云ふことをば姑く問題外に措いて、 であるとか名づけられることにもなるであらうが、この萠芽を發達せしめ、この可能なるものを實現化 るものとして、これに賦與したるもの、從つてそれは Verborgene Elemente であるとか、Geheime Kräfte て與 ものと觀て居たと云ふことが明かである。しかしこの精神や、理念は決して完成せられたる形態に於 lichen Geschlecht von der Gottheit eingehauchte Leben と云ふ様な句も見えて居る。更に一八八〇年の 云ふ言葉も存するのであるが、これ等の言によつてこれを見れば、彼は精神や、 と云ふ。又他の處には das Göttliche und Ewige, aus dem die Ideen quellen であるとか、das dem mensch-Ursprung zuschreiben ~以らい が、今その二三を擧ぐれば、 か、 もの、 「쇅山」中以远 Ich bleibe einfach bei dem Worte, dass Gott dem Erdkloss seinen Geist einhauchte 先づこれをその起源の方面から見れば、(この方面が彼の宗教觀と關係を有するのであるが) へられたるものではない。むしろそれは云はゞ萠芽として、神の人間に植付けたもの、 理念とか云ふものは、 云はゞ神の人間に吹き込める息である。このことを立證する語句は決して尠しとしないのである ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの 彼によれば、神にその起源を有するものである。それは神の人間に與へ 彼は 或は Die Idee ist göttlichen Ursprungs ~!以る、Die Idee, der wir göttlichen Der Geist des Staates ist göttlicher Anhauch ~いろう Gedanken Gottes (船田) 理念を以て神 或は可能な から來た 精 たる 神と Ļ٦

Lebens ist die Bewegung nach der Idee, nach einer größeren Vortrefflichkeit. ~° そのもの丈けをとつて考へて見れば、それは己れ自らの中に理想を有しこれに向つて進んで行くもので 想 精神からのみ出來て居るものではない。若しさうだとすれば人間は神と異なる所がなくなるであらう。 と云ふことが學者によつて問題視せらるゝのであるが、 的生命は進步するものであると云ふことになる。 はこのことについて次の如く云ふ。Alles Leben trägt sein Ideal in sich: der innerste Trieb der geistigen あ soll das nicht so noch andauern? Denn das Ziel ist bei weitem nicht erreicht und die geistige そこには障害あり、失敗あり、退步も往々あらはるゝことがある。しかしそれにしても大局より之を見 しかし人間 を云へば、 換言すれば現實的な歷史をはなれ、 れば進歩は之を否定することは出來ない。 る。換言すればこの精神は己れの本質を完全に實現せんとする衝動を初めから有するものであ へ向つて進むべき筈の精神も、 彼は は他の動物と同じ様に、地上の動物である。從つて單獨的には、必然的に、その生得 たしかにこれを進歩するものと考へて居たと云はねばならぬ。しかしながら人間は單に selbst den grössten Hindernissen und widerwärtigsten Einwirkungen zum 現實的な人間の歴史に於ては、一直線的に進步することは出來 觀念的に、可能なるものとして神の人間に賦與せる精神について之 彼は云ふ。 體彼は進步を認めたか、 Bisher ist die geistige Entwickelung noch しかし精神的生命自體についてこれを云へば、 それともこれを否定したか この點から見れば 的な理 な 精神 彼

興せる精神を完全に實現せしめんとして居るものと云ふことが出來る。 非常に宗教的であり、 想へ向つて進み行く精神の運動で vielleicht unendlich. ~° と云ふのも、 形而上學的であり、 かゝることを意味するものではなからうか。 彼から見れば人間史は、 ある。 之を絕對 又目的論的であつたと云はねばならぬ 者た よしそれが る神の方より云へば、 如何なる障害に遭遇するも、しか この様に見て來れば、 彼が 神は人間史に於て、 Pläne der göttlichen 彼の思 b E なは理 Welt-想 の賦 は

あり、 精 ば、 た方面 云ひ、 理念と云 か、 と新教との對 72 神 る結 以上は彼の理念觀 人間 Kämpfende Kräfte ح grosse からも考察して居たのである。 Ł カジ ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの 等 過 カゞ 或は現實化し、 Richtungen 式 如きもの カジ 去に於て作 卽 ち客觀 Kräfte 國 家の の一面であるが、 等 は り出し なと云 とIKひ、allgemeine であつて、 内部に於け 的理念と稱せらるべきものである。 grosse Richtungen りゅう allgemeine Tendenzen 客觀化せる精神や精神的傾向が理念と名づけられる。かの objektive Ideen と た文化 ふが如きは、 何れ る民主政 の總體、 この場合に於ては、 しかし彼は先きにも云つた様に、 も彼 Tendenzen と伝ひ、叉entgegengesetzte Doktorinen であると と貴族政 何れもこれを表現せる言葉である。實際について之を云へ (船田) の所謂理念である。 吾人を圍繞する精 の對立、 人間の思考や意思の作用によつて生産せられ 彼の所謂羅馬帝政の理念、 これ等は L 神的環境、 かしその最 である。 理念をば現實的な歴史に現は entgegengesetzte 過去と現代をつなぐ傳統 も明かなる規定は、 宗教方面に 中世 Doktorinen 於ける舊教 獨逸帝國 C 0 0 的 n

n ないと云は 0 に於け あ 近 る。 もそれである。 世 る大 史の 十六世 re ねば 畤 な 13 期 .3 何 紀 な 精 人 この の後半 B 前 B ついて」(Uber die Ø 的 知 様 傾 n に見て來れば彼の所謂理念は歷史を超越したり、 に於ける宗教 向 る所で、 を 指して云 今更云ふ迄もないことゝ Epochen der neueren Geschichte)の中 的運動、 ふので あ 十八 る。 例へ 世紀に於け ば 十五 思 Z る か、 世 功利 紀 それ 主 及 びナ六 美 (= 的 又はその埓外に出づ t (= 傾向 te 於 世 け ば る指導 指導 と云 紀 0 Ħij 的 Z. 4 理 カジ 的 1-念と 廽 加 於 念 3 8 (J 13 H 0 ė 谷 0 說 13 垄 世 HIJ は O) 紀 ...... 何 術

う。 いて、 て宗教 彼 なら C 3 歷 從つて れ迄述 プ な を詳 史に入つて來たので は 何 L 的 ラ 細 咖 n ۲ 特 ~ 然 祕 ģ 1 ŀ 7 ч 並 Ü は 3 主 C 方 義 決 に ラ *"* 來 あ 5 に偏 る所 して 學 > 72 をとる 者 所 ケ 神 0 L なくして、 後 0 からして、 あるが、 者に數 もの 12 祕 之を論ずる 理念を問題とする時は、 もの 的 1 T あ と見ねば あ ^ ると見 Z 6 L 彼は當然理念を二つの方面から考察して居たものと云ふことが出 6 るべ ず、 もの カコ n を批評 し彼は又初 3 な 0) 形 る Š A A H B 丽 B E すると云ふことは避 Ø 0 學 カゞ は は 的 その何 め神學に志した程で、 ラン 1 あ Ħ その Ď, 1 કું z あらずとな ~ 又他 起源 れか一 は、 3/ ッや、 先 0 方に於て 方面 3 方面 v すも 1-٤ 0 迦 ね カコ 1 ~: ば 見方のみによって之を規定しては は らする見方に y 0 その宗教的教養は決して尠く 歷 た様に、 冷饮 ならぬことで **....**, 史に現 等で あ る。 あ 文獻學 前者 る。 は 從ひ、 n ある を代 72 今こ 方 的 研究 かり 表 面 カコ n 쑄 くて す C 要 頂 t 0 3 す 3 學 彼 b B 來 進ん る 者 t を以 0 P 13 0 は 30

う。 verschieden と云つて居ることは、これを明かにするものと云はねばならぬ。(1一、二、二〇) ある。 良心 wahres かつた。宗教的教養の方面からしてはこれを神に關係せしむることも、 ーテルに負ふ所も多大であつた。從つて彼は歷史家としては、理念を歷史の埓内に於て求 なかつた。彼は一面に於てはツキデデスや、ニーブールの影響を受けたが、他面に於てはフィヒテやル しかし宗教的信仰を前提とし、これを基礎として、歴史研究に從事すると云ふことは、 Ō 彼は宗教家たらんことを志せる次弟ハインリッヒに與へたる書簡中に 到底許し得る所ではなかつた。彼はむしろ史實の研究によつて神意のある所を知らんとしたので Ziel. Bei diesem wahren Ziel, hoffe ich, finden wir uns zusammen; es seien auch unsre Bahnen 彼には當然許されたことであら Fern, fern sehe ich mein め 彼の歴 ねば ならな 更的

## 參 考 文 獻

ランケ全集中、この論文に特に關係あるものは、

Bd. 24. Abhandlungen und Versuche

" 33-34. Geschichten der romanischen und germanischen Völker.

" 37-39. Die römische Päpste.

40-41. Historisch-biographische Studien.

49-50. Zur Geschichte Deutschlands und Frankreichs.

51-52. Abhandlungen und Versuche.

53-54. Zur eigenen Lebensgeschichte.

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの (船田)

(#S)

L. v. Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte.

**火** 他

Ottokar Lorenz, Die Geschichtswissenschaft in Hauptrichtungen und Aufgaben. 1886.

" Leopold von Ranke. 1891.

Karl Lamprecht, Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft. 1896

Wahan Nalbandian, Leopold von Rankes Bildungsjahre und Geschichtsauffassung. 1902

Eugen Guglia, Leopold von Rankes Leben und Werke. 1893.

Hans F. Helmolt, Leopold Ranke. 1920.

Hermann Oncken, Aus Rankes Frühzeit. 1922.

Zur inneren Entwicklung Rankes. (Gothein-Festgabe. 1923. S. 199-241.)

Ernst Simon, Ranke und Hegel. 1928.

Otto Diether, Leopold von Ranke als Politiker. 1911.

Joachim Wach,

OMoriz Ritter, Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft. 1919. S. 362-421

Das Verstehen. 1933. Bd. III. S. 89-133. Die Lehre vom geschichtlichen Verstehen bei Ranke.

Erich Rothacker, Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1920. S. 153-162.

Ernst Troeltsch, Der Historismus und seine Probleme. 1922. S. 271-277.

Georg von Below, Die deutsche Geschichtschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unseren Tagen. 1916. S. 21ff.

Benedetto Croce, Zur Theorie und Geschichte der Historiographie, 1915. S. 244ff.

Otto Hintze, Historische und politische Aufsätze. 4. Bd. S. 1-12. Über individualistische u. kollektivistische Geschichtsauffasung

Friedrich Meinecke, Die Entstehung des Historismus. 2 Bde. 1936. 2. Bd. S. 632ff. Beigabe: Leopold v. Ranke, Gedächtnisrede gehalten am 23. Januar 1936 in der Preussischen Akademie der Wissenschaften.